

石狩川治水100年 次の100年を迎える座談会

日付：平成23年2月14日（月）14:30～17:00

場所：砂川遊水地管理棟

参加者

東川町長 松岡市郎

深川市長 山下貴史

滝川市長 田村弘

砂川市長 菊谷勝利

浦臼町長 岸泰夫

三笠市長 小林和男

石狩市長 田岡克介

（上流から記載）

札幌開発建設部

部長 北村匡

事業調整官 桜田昌之

次長 宮島滋近

旭川開発建設部

部長 本田幸一

次長 平野令緒



【座談会】

<川とまち、主に治水について>

札建部長 昨年が石狩川治水100年ということで、石狩川の計画的な事業が始まって100年、今年は101年目を迎えることとなります。また、観測史上最大の洪水となった昭和56年8月の洪水からちょうど今年が30年目を迎えます。また、北海道開発局が開局をいたしまして60周年という、そういう年にもなっています。

そのような年でございますので、本日は石狩川流域というつながりを共有する水源から河口の各市町から皆様にお集まりいただき



札幌開発建設部 北村部長

まして、流域の将来に向けた幅広い取り組みについて意見交換をさせていただければと存じます。

石狩川と町、まちづくりの関わりですとか、町の枠組みを越えた連携などの取り組み、あるいは、今後の川づくり、流域づくりへの期待など、いろいろな観点からご意見をいただきたいと存じます。

今日の懇談会を契機に、さらに流域を一つの軸としたつながりが深まればと存じておりますので、今日はよろしく願いいたします。

はじめに石狩川とまち、まちづくりとの関わりについてお話を伺いたいと思います。古くはまちづくりと治水は深く関わりがありましたがこのような観点でも結構でございます。昨年夏に記録的な大雨がございました東川町長さんから口火を切っていただいてもよろしいでしょうか。



東川町 松岡町長

変な事態にならないと大切なものの有難みを忘れると思いますがダムはその典型ではないかと感じます。

深川市長 公共事業について例えば今、考え直す時期にきているのではないかと考えています。ダム以外で洪水を防ぐには堤防の嵩上げや、遊水地建設等が代替として考えられているようだが、ダムのほうが安上がりとなる場合もあるのではないか。何が一番安く、効果を上げるのかという原点を考える時期にきていると思います。



深川市 山下市長

石狩川流域は、治水事業のおかげで日本の食糧基地として発展してきたが、一方で農業関連の公共事業が縮減され、食糧基地としての役割は危うい。必要な公共事業の選別は、費用対効果が重視されているが、これも疑問です。国は公共事業と地方交付税という財源再配分の機能を持っているが、地方経済が疲弊している現在、公共事業を費用対効果だけで見るとはならず、地域経済も含

めトータルで公共事業のあり方論を考えるべきだと思います。

地方は都会に比べ高齢化が進んでいるが、社会保障と公共事業が地方の新しい仕組みづくりにつながる。これは次に高齢化が進む大都市の先行事例にもなるのではないか。

札建部長 公共事業論という話だったと思いますけれども、ダムに関しますと、今、なるべくダムに頼らない治水という議論があって、今、まさに検討を進めているところでございますが、その中で、一応、治水の安全性を確保するためにどの手段を選ぶかというのは、コストを重視して見ていくといった方針が出てはおります。そういうことを見ながらよく検討を進めていくことだと思っております。それから、公共事業論になるとなかなかコメントしにくい面もありますけれども、やはり、いろいろ、そういった根本に立ち返って考えるべきことはたくさんあるというふうに感じております。

三笠市長 三笠の町では江戸時代、飛騨屋久兵衛が何年にもわたって桂沢の木材を切り出し、年に1度融雪にのせて川を流し、石狩の河口で船に積んで運んだという記録が残っています。その後石炭の発見で石炭産業が栄えたが選炭や重油で洗い出したために川が汚れてしまった。近代化を進める中で、近代化すればするほど川は汚されてきた。



三笠市 小林市長

石狩川の新たな100年を考えると最大の課題は災害を防ぐことではないか。幾春別川は流域面積が小さいが、ひとたび洪水が起これば、本流につながり石狩川全体へ影響を与える。幾春別川総合開発事業は今回見直し対象になっているが、もしダムが無い状況で大洪水が起こった場合、三笠の都市機能は成り立たなくなってしまう。またそれが多目的ダムの場合、洪水被害を防ぐほかに、発電や灌漑など利水にも役立ちます。このようにダムを計画する場合は相乗効果をねらって多目的ダムにしていくべきではないか。

更に、世界的人口増加の中、資源を持たない日本の国にとっては、水は将来にわたって展望の開ける大きな資源にもなるのではないかと考えます。

札建部長 ダムについては、治水の基幹的施設であり、多目的で利用を図っていくことは大切な話と思います。先ほど今年の洪水の話が東川町長からありましたが、災害基本法等に基づいて避難勧告などの責任を持たれる中で災害があった場合、いかに素早く対応できるかが重要になると思います。災害発生時を念頭に、災害情報や災害対応上の施設についてお気づきのことがあれば伺いたいと思いますがいかがでしょうか。

深川市長 石狩川の整備状況、つまり治水事業が不十分ということであれば、まず安心できるように治水事業を進めてもらいたい。治水安全度を高める手法は、ダム、河道掘削、遊水地等があるが、これは与えられた条件の中で考えてもらえればいいと思います。

治水の整備はこれからの石狩川100年の大きな課題ですし、千歳川の洪水対策の問題は、根本的な解決を図るために太平洋側への放水を考える余地を残すことも必要と思います。

札建部長 次の石狩川100年は現状の治水水準を高めていくことが大目標の一つであると考えます。

札建次長 千歳川放水路については、開発局の諮問機関である石狩川流域委員会の中でも、治水上のベストの対策は放水路計画という議論がありました。地域の方々からは苦勞して開拓した土地を遊水地にするのだから、もし効果が間に合わない洪水が来た場合は放水路計画を再検討してほしいとも言われています。



札幌開発建設部 宮島次長

先ほどの「災害情報等について」とありましたが、聞いた話で、例えば排水ポンプ車を出動させたが、「〇〇橋へきてくれ。」という要請に対して、消防関係者と警察、河川管理者など各機関の間での場所確認に意外と時間がかかる。迅速な対応のためには位置情報が早く確認できるようにする必要があるように聞いています。

深川市長 宅地や農地の水が川に流れずに溢れる内水氾濫は予測しにくいところがあり、防災情報が出されたときには既に被害が出ていることがある。自治体は、現場状況から被害を読むような人材、シミュレーション能力を持った人材を育成する必要があるのではないか。

内水氾濫などを起こして、感じることは二つあります。一つは警報、注意報が、被害が起きた後から発表される、要するに予測ができないということなのでしよう。

つまり、ある程度被害を予測できる能力開発を自治体の職員が持たなくてはいけないのです。あらかじめ被害を想定して、それを読む人材開発が必要なのです。これを何とかみんなで力を合わせてできないものかという思いが一つあります。

それともう一つは、何十年か水害と付き合ってきて感じるのは、堤防を越流

して決壊が起こるかもしれない。それが読めないわけです。越流するのか、極端なことをいえば、下流で堤防が切れたら水位がぐっと下がりますから、「何で川の水位が下がったのか?」、いや「下流で決壊したのか?」とかということです。

また、水位が上がってきたら次はどういう状況が生じるのかというシミュレーション能力も我々に身につけていないのです。ですので、そのへんの情報ももう少し円滑化すると同時に、我々もシミュレーションする能力開発を、力を合わせてできないものかなと思います。

札幌開発建設部 桜田事業調整官 年に数回、災害訓練をしているが、開発局内で閉じているものですので、今後は自治体も含めて情報共有をまずしっかりしなければならないと考えていますし、防災訓練レベルのものから取り組んでもいいかなと思っています。



札幌開発建設部 桜田事業調整官



旭川開発建設部 平野次長

旭建次長 以前、岩見沢河川事務所の所長をしていましたが、事務所と自治体が一緒にロールプレイング形式の防災訓練をしていました。自治体と日頃からコンタクトを取っておく意味では、河川事務所が持つ役割は大切だと考えています。

砂川市長 災害の話では、昭和36年、37年、まだ砂川も景気が良くて建設業がかなりあったころは、建設業関係の人が自然発生的に災害時にそれを防ぐ、助け合うということができていました。今は、全くそういう状況下ではありません。したがって、いったん河川が氾濫したときにも災害対策にはどうやるかという、全く対応していないのです。

例えば、市の職員や自衛隊さんも氾濫の対応等の経験が少なくなっている。そして高齢化になっている。この中で、一体、水がついたときに誰がどうやって地域を守っていくのか、かなり危機的な意識を持っています。そうすると広域的にお互いに助け合いをしながら水害から身を守る必要があるのかと思っています。

今までは、自分の町は自分で災害対策すればいい



砂川市 菊谷市長

いという時代でしたが、例えば、滝川市さんと近いところの氾濫のときにどうやってお互いに助け合うかなど考えていかなければならないと思います。

3人に1人の割合で高齢化の時代、助け合うにも大変なのでなかなか来られないわけです。この意味では、開発局さんの災害時の対応についても伝承していることが大事だと思います。

治水で水害のない町を早くつくるのが一番大事なのですが、現状は、やはり、そういうことを認識しないとならない時代に入ったのかなという感じはしています。

札建部長 整備が進み昔に比べると大規模災害は起こりにくい状況だが一旦洪水が起きたら大きい被害になる。日頃からの情報交換や訓練が必要であり自治体と協力が大事だと思います。そういうものを自治体の皆さんと一緒にやっていければと思います。

深川市長 このような防災に関する会合は、市町村だけではできないので、札幌開発建設部が声を掛けて続けてほしい。

ところで、河川管理者は水位計測をしていると思うが、水位情報を自治体や一般の人も見ることができるのでしょうか。

札建事業調整官 水位情報はインターネットで公表していますし、携帯電話でも見ることができますので、だれでも見ることができる状況になっています。

札建次長 各市町村においても現在は、開発局と自治体間に光ファイバーがつながっていて各市役所や役場でも水位等の情報や川の映像が見られる仕組みになっています。災害時これをどう利用するか重要です。

話がちょっと変わりますが、北海道での洪水は今までは低い土地を中心に水が付く傾向にありましたが、最近は比較的高い土地での内水被害、いわゆる都市型の内水水害が北海道でもしばしば見られます。これは雨水配水管等が雨水を処理仕切れなくなり被害が起こるのですが、今後は雨水管の配置等の情報を相互に早くやりとりし、被害を軽減していく取り組みが必要であると思います。

石狩市長 昨年大雨では、厚田の市街地でも雨水の集中が原因で内水が溢れました。予想していなかった事態だったがこれからは起きうることでしょ。

三笠市長 三笠は沢のまちで、山から低いところに水



石狩市 田岡市長

が一举に出てくるので、このような内水氾濫ケースは想定されます。幾春別川は同じ川でも上、中、下流で水量が違い、今の川では全ての洪水を流せないで、川底をけずって支川からの水を受け入れるか、ポンプアップするしかない。しかし幾春別川の地質構造を踏まえると、岩盤があり川底を掘削するには限界があるのでどうやって水位を下げるかが課題になっています。

石狩市長 石狩市は河口のまちとして上流の治水効果を全部受け、また流域の汚れも全部受けているまちでもある。かつて茨戸の放水路建設は何年も反対運動があったが今ではもっと開門してほしい、海の栄養源になる川の水は流してほしいという声も多い。茨戸川の放水路のデータや事業反対以来の経過、住民意識の変化なども公にしていくとよい。

<川の活用について>

札建部長 次に石狩川の活用についてお話を伺いたと思います。石狩川そのものの活用や観光資源としての川、あるいは、いろいろな川に関する施設もあります。今後、これらをいろいろと活用していくことも考えられるかと思えます。

それらの活用によって、流域の各市町村で協力して取り組むような活動も考えられます。この点についてどのような内容でも結構でございますので、幅広くお話を聞かせていただければと存じますが、いかがでしょうか。

浦臼町長 明治25年に浦臼に入植した人々は、裸馬で川を渡ったという話が残っているが、代替わりすればこの話も消えてしまうと懸念しています。また坂本竜馬の子孫の家が浦臼にあったがその場所も分からなくなってしまふ。このような史跡に看板を立てるなどして後世に伝えていきたい。



浦臼町 岸町長

また、浦臼町には道内唯一残る渡船場がありますが、今年3月、美浦大橋の開通によりなくなることになりました。なくしてしまうのはおしいとマスコミ各社からよく言われますが、町で維持するのは大変です。やめることは簡単なのですが、逆にこの渡船を目玉に石狩川を利用した観光開発ができないかと考えています。私どもがよく本州に行きますと、四万十川にしても信濃川にしても、いろいろな屋形船、あるいは溪流下りのようなものがあるわけです。せめて、北海道でもあいう船をどこかの区間で導入することによって、石狩川を利用した新たな観光開発ができるのではないかとというふうに私は日ごろ考えているわけです。

特に、空知地域は観光の面に余り優れたというか、全国のお客さんを呼ぶようなものがないわけですから、これを一つの目玉に考えたいと思うのです。というふうに考えております。

次の石狩川100年に向かっては、学園都市線を利用して浦臼へ来てもらい、帰りには屋形船で川を下るという新しい観光開発を流域連携で進めていくことを提案したい。

砂川市長 明治、大正の時代と今の時代とは川の恵みは全然変わってきていると思います。例えば、砂川は石狩川の流域の中ほどにあり穏やかな流れで砂利や砂の堆積場所として恵まれたところです。明治時代に国鉄を通す中で砂利を用いたり、炭鉱の開発にトロッコの線路に砂利がほしいといったことで産業が発達しました。また、交通もかつては車もない場合には、川を下って



農産物を搬送したり、材木の輸送で芦別や赤平からいかだを組んで流してきて、このようにして砂川は明治45年に三井木材というものができたりもした。古い時代は、かなり川の恵みがあったのだということがわかります。

最近川から離れてしまい川の恵みがだんだん薄れてきているというような感じがします。

その中で、昭和62年に砂川遊水地ができて、今、ハクチョウが5,000羽ぐらいは来ています。また、それを見に5,000人の人が来ていることで観光開発をしております。浦臼町長の発言のように新しい産業をおこすのではなく、観光資源的に石狩川の今後を我々の新しいまちづくりとして叶うものではないかと思えます。

また、聞くと川と水と精神的な部分とのつながりというのは大事なのだということで医師会さんをお願いして、近隣の病院の患者と川を調和させながら、そして観光へと結びつけるかということで、取り組んでいるわけです。

石狩川の魅力を引き出していく時代になったのかなと思っています。

石狩市長 昨年は治水100年と言っておりますが、これは明治以降の治水の歴史ですが、石狩は400年前からの歴史があり、明治以降だけ取り上げるというのは違和感があります。石狩には明治からはじまる近代治水以前に柳を使った治水工法があったこと等を治水100年のプロローグとして加えたらどうかと思っています。それから素人感覚

ですが、これからの石狩川流域を考えていくと減反政策を受け入れていて良いのだろうかとも考えています。将来のこの地域の戦略を考えると米の政策というのが重要になると思います。昨年12月、石狩市の倉庫が中国向けの米倉庫に指定されました。石狩川を活用し、米を船で運ぶことを含め、大規模な冷温倉庫群と大穀倉地帯があることを活かすべきだと思います。これからの100年は、東アジアの食糧資源地域として石狩川流域を捉えいきたい。

深川市長 石狩川の水の恵みで大穀倉地帯を成立させ、流域を一つのまとまりとして世界にアピールしていく時代がきている。取れた米や産品を国内だけでなく、中国、アジアに売っていく時代がきていると思います。石狩川流域のイメージを出して産品を国際的に売っていくためには、官民が連携していくこと、流域が一つに団結できるかどうかが問題です。米の生産と灌漑を考えた時、石狩川の水質はどうかに関心がありますが、どうでしょうか。

札建次長 石狩川の水質は、昭和40年代から比べると良くなっている。濁っているように見えますが水質は良好を維持できている状態だと思います。

石狩市長 川の水質は、かつては選炭や製紙業の影響で悪くなったことがあるが今は相対的にきれいになったと感じています。茨戸川も浄化事業が20年近く行われきれいになった。



深川市長 石狩川の水質が良好ということなら、「環境の石狩川」とアピールしてはどうか。

石狩市長 中国では畑作用の水が不足しているので、浄化した水ではなく石狩川やダムの水をそのまま輸出することができないか。船に巨大な風船をつけて水を運ぶ技術も検討されている。

札建次長 水の輸送に関してはタンカーのバラスタタンクに工業用水を入れて運ぶ実験が行われているやに聞いている。

深川市長 昔はタンカーのバラスタが分離タンクではなかったが、今はセパレートタイ

プのバラストタンクなので、きれいな水を入れて中東に持っていけるが、なかなか商売にはならないらしい。

石狩市長 石狩市は工業用水を石狩川から取水しているが、この水をどこかに売ることも考えられないだろうか。

<石狩川のイメージアップ、流域としての協力について>

札建部長 時間が残り少なくなってきましたが、先ほど山下市長から石狩川流域のイメージアップというような話もありましたし、商売の話に絡めてですけれども、流域としての協力というような話も出ていたと思います。

そのあたりで何かご意見がございましたら、今後につながるかなという、そういう気持ちがありますので、いかがでしょうか。

滝川市長 石狩川と同じような大流域である利根川や信濃川の流域を構成する自治体数は多く、これに比べて石狩川は46であり、まとまりやすい数だと思います。また、石狩川はほかの河川にはない旧川が多い。実は水質もよくなっています。しかし、水量が足りない、見栄えが悪いことが課題だと思うのです。

茨戸川のように国が力を入れてすごく良くなったという実績がある一方、そうでないところが山ほどあるのです。これをいかに活かせるかということだって、石狩川独特の課題、特質だと思うのです。

また、広大な河川敷があり、ほかの河川とは違うほど高度利用されているのではないかと思います。先ほどの観光的な活用とかいろいろな方法を本当に次は考えられないのかということもまた、石狩川の特徴としてあるのだろうと思います。

さらに、滝川市では雪を少し捨てさせてもらっていますが、雪処理システムと川の関係というのも含めて北国ならではの課題というのがあると思うのです。何らかの形でこの46市町村が結びついていく議論をする、知恵を出す。そして、石狩川を所管する札幌開発建設部と旭川開発建設部がその辺をつなぐ役割を果たしていくということが、本来必要なのではないのでしょうか。



滝川市 田村市長

三笠市長 8000万年前の白亜紀時代、三笠市は海でした。この白亜紀後半に地球温暖化で生物の6割が死滅したという話があります。三笠市立博物館は全国の大学と共

同で地球温暖化と生命への影響を研究していきまして、これからの100年は、温暖化の影響でこれまでとは違った生物環境になるのではないかとこのようなことがあります。全ての生物は水から生まれ、石狩川はたくさんの命を育んできた。その一方で石狩川は暴れ川だったということで水害に苦しめられてきたが、その水が農業を育てたとも言えると思います。

深川市長 三日月湖は、宮島沼のように重要なものもあるのでこれらは残し、あとは農地として利用してはどうか。

河川敷の有効利用は進んでいるが、水辺まで近寄れる場所がない。親水の観点から水のそばまで近寄れる場所づくりも必要ではないか。

東川市長 私どもの町でもダムに対し反対運動もありました。昭和40年代の後半、ダムをつくと水温が下がり米の生産が落ちるのではないかといわれました。しかし、実際は、ここ数年は豊作になっているということです。

21世紀の命を語る時に、それは水に聞けという言葉があるそうです。

この100年を振り返ってみますと水田、水田と行って整備してきましたが、その後、減反政策が始まって50年近くなります。そして、20世紀はいつみれば油田の時代だったと思うのです。僕は21世紀というのは水田の時代にもう一度戻すべきだろうと思うのです。

水田の時代というのは、水源でもってエネルギーもできる、それから食料もできる。それから、その食料も、稲から今までは粒の文化しかなかったですが、粉の文化があり、液体の文化があるということです。水田の時代にしていくためには水田を大型にして、もっと効率的方法にしていく。ダムというのもきちんと整備していく必要があると思います。ダムがあつて水がとまることで人も集まる。地域の経済にとんでもない大きな貢献をしていると思うのです。

川の駅というか水の駅といったものをつくって、サケが遡上する様子をガラス越しに見えるようなところを川にもつければ、そういうものに感動するのではないかと思います。様々なものと組み合わせて、いくつかつないで魅力にすることができれば地域というものは、なんぼでも元気が出るのではないかと思います。

ですから、今、何か行動を起こすということによって、僕はそれ



も再生されることだと思っております。ですから、知恵を出して何かをやるということをやったらいいのではないかと、そんな気がします。

滝川市長 従来の期成会活動は、公共事業の推進のために活動してきたが公共事業の削減とこれからの地域開発のあり方を踏まえると再整理する時期に来ているのではないかと。今後、このようなことで地域別、ブロック別に集まったほうがやりやすいこともあるかもしれないが、流域でまとまって何か行動を起こすことも重要だ。

深川市長 米の生産調整受け入れは、生産者が有利と判断しているからである。将来、米は好きなだけ作ってよいという方向になるであろう。

社会資本整備総合交付金は、社会資本整備を進める上で大事なことであるが、肝心なことは必要などころにお金がまわる仕組みがあるかどうかである。また、交付金の予算要求は内閣府がするということが、それでは地方の声が反映されず、交付金は減る一方である。必要などころにまわらない予算になりかねない。

札幌建設部長 ありがとうございます。

今日いただいた意見などを踏まえて、皆さんとともにいろいろな取り組みを進めてまいりたいと思います。

特に、一つ流域の市町村で何がしかの形でまとまるといいますか、いろいろ連携してつながっていくというようなことを取り組んでいくのがいいのではないかとというようなお話をいただいたと思っております。また、具体的にはいろいろご相談をさせていただきながら進めてまいりたいと思っております。

旭建設部長 去年の国勢調査が終って、おそらくまた人口が減って高齢化したという数字が出てくると思うので、これからこの地域をどうやって経営していくかについて、今回の座談会のような機会をまたつくりながら連携や協力の仕方を考えていかないと、一つ一つの自治体では手におえないものなどもあるかと思っております。

そのようなことから私どもとしましてもこのような機会をえて、首長の方々と貴重な意見交換をさせていただきながらいろいろな事業を進めていくというのは大変意味深いことと感じた次第でございます。

石狩川流域は旭川、札幌と二つの開発建設部で管理してきたわけですが、これまで100年間治水に向けていろいろな先人の努力がありました。私どもの組織がある限りは努力を引き継ぎながら、これからの100年に向けて、また、地域でいろいろな活動を皆さんと連携しながら取り組んでいきたいと考えております。



旭川開発建設部 本田部長